

多義語の語彙ネットワークに関する研究 (2)

— 英語学習者の語義習得についての一考察 —

青谷法子

A Study on the Lexical Network of Polysemic Words (II) — How Japanese Learners of English Acquire Polysemic Adjectives —

Noriko AOTANI

Acquiring every sense of polysemic adjectives is one of the hardest parts of language learning, because the meanings of those adjectives are extended through metaphor and those metaphorical expressions may reflect cultural differences. For example Japanese adjective 'omoi', whose core meaning is equivalent to 'heavy' in English, can be used with 'byoki' (disease) expressing the seriousness of the disease. 'Omoi byoki' (serious disease) is one of the dead metaphors of 'omoi'. Dead metaphors and synaesthetic meanings are so common that people don't realize them as metaphors. Do Japanese learners of English think 'omoi byoki' can be translated into 'heavy disease' in English? What is the basis of their decisions about which metaphors can be translated literally and which metaphors cannot? The purpose of this study is to obtain some clues to answering these questions through experiments.

This study investigated the results of judgment tests administered to 29 subjects. They were given 16 Japanese phrases that contained 'omoi' (heavy), and were instructed to make a judgment if 'heavy' can be acceptable as a translation of 'omoi'. They were also given 12 synaesthetic phrases in Japanese, and instructed to make a judgment if they can be literally translated into English.

They tend to think 'omoi' and 'heavy' have only a few meanings in common, and synaesthetic expressions in two languages are also different. The result suggests that their judgments were made based on the thought that there is a considerable distance between the schemata of Japanese and English.

1. はじめに

人がある言語を理解できるようになるためには、相当量の語彙を習得し、記憶に保持し、必要ときに利用できる能力がなければならない。語彙を習得するということは、その語を媒介

として外界を認知することであり、外界と自分の経験によって、その語の意味内容は再構成され、拡張していくと考えられる。このようなプロセスを経て心的に構造化されるひとまとまりの知識は認知科学の分野ではスキーマと呼ばれ、人間の知覚や文章理解に関する研究の有力な手段とされてきた。

日本における英語学習では、語彙の導入は、日本語の対訳を与えることによってなされることが多く、L1（母語）= L2（第2言語）というストラテジーが成り立ち、学習者は日本語によって構造化されているスキーマの中に英語の世界を置換しようとする傾向がみられる（Takahashi, 1984）。このようにして生じる母語干渉は負の言語転移ともいわれ、英語教育の現場では不適切な中間言語として扱われてきた。例えば日本語の形容詞「甘い」には<厳格さの不足>という意味内容があり（青谷, 2001）、「甘い考え」という表現を可能にしているが、英語の‘sweet’にはそのような意味内容はなく、「甘い考え」=‘sweet idea’とはならない¹。多義的な構造を理解するためには、日常的な学習体験から得られる1つひとつの事例を再構造化して、その語の持つ意味体系を自ら構築する必要があると考えられるが、L1の心的語彙がすでに存在している記憶システムの中に、L2の心的語彙を新たに構築するプロセスについては、現在のところ十分に解明されていない（Meara, 1984）。

2. 目的

英語の学習過程において、例えば‘heavy snow’などの表現が教科書に出現すると、学習者は‘heavy’と「重い」が同義ではなく、ひとつの語がいくつかの意味内容を持つような多義の構造においてはL1=L2の公式が成り立たないことに気づくはずである。英語で何かを表現しようとするとき、初級学習者は日本語を媒介として翻訳しながら英語表現を導き出していると考えられるが、その際、日本語の概念をそのまま直訳して用いることができるかどうかの判断能力が必要とされる。

本研究では、日本人英語学習者がどのような表現に対して日本語と英語の概念が一致すると考えるのか、またどのようなとき一致しないと考えるのかについて調査を行い、L1による干渉とL2の心的語彙の関係についての知見を得ることを目的とした。

3. 方法

専門学校的女子学生29名に対して、形容詞「重い（重）」を含む日本語の句を提示し、それを英訳した場合「重い（重）」の部分に‘heavy’を用いることができるかどうかについて、「表せる」「たぶん表せる」「たぶん表せない」「表せない」の4段階のいずれかで判断するように

¹ ‘Sweet idea’は「良い考え」の意味で使われる。

教示した。

また共感覚表現を含む日本語の句を提示し、それらは提示されている英語の形容詞を用いて英訳できるかどうかについて「表せる」「たぶん表せる」「たぶん表せない」「表せない」の4段階のいずれかで判断するように求めた。いずれも時間制限は行わなかった。

4. 結果

4.1 形容詞「重い」についての結果

「重い」は軽重を表す最も基本的な形容詞のひとつで、その多義の構造は次のように分類される²。

(1) 物理的・心理的に重量がある様子。

- ①<目方(基本義)> 具体物の目方があること。
- ②<大量> (必要以上に)大量であること。
- ③<憂鬱> 心理的に憂鬱であること。
- ④<不快感> 普段意識していない部分に不快感があり気分が晴れないこと。
- ⑤<深み> (音が)深みがありよく響くこと。

(2) 程度が高くて深刻な様子。

- ⑥<過酷> 困難で耐えがたいこと。
- ⑦<重大> 重大であること。
- ⑧<重要> 重要で大切であること。
- ⑨<深刻> 重大で深刻であること。

(3) その他

- ⑩<工業> (鉄鋼・石炭などの)原材料を生産すること。

(1) の意味においては、⑤を除き、‘heavy’ との意味の対応関係に共通点が多くみられる。

(2) の意味においても、⑨を除き、‘heavy’ との対応関係に共通点が多い。今回はそれぞれの語義から「重い」と‘heavy’の意味に対応がある次のような表現を用いて調査を行った³。

- ①「重い荷物」= ‘heavy luggage’、
「重い体重」= ‘heavy weight’
- ②「重い食事」= ‘heavy meal’、
「重い運動」= ‘heavy exercise’
- ③「重い気分」= ‘heavy feeling’、
「重い心」= ‘heavy heart’、

² 分類は『現代形容詞活用辞典』における意味記述に基づいて行った。

³ ⑤と⑨の語義に関しては‘heavy’ との意味の対応がないため調査には含めなかった。

「重い雰囲気」 = ‘heavy atmosphere’

④ 「重い頭」 = ‘heavy head’

⑥ 「重い労働」 = ‘heavy work’、 「重い税金」 = ‘heavy tax’

⑦ 「重い責任」 = ‘heavy responsibility’

⑧ 「重い会話」 = ‘heavy conversation’、 「重い内容」 = ‘heavy content’

⑩ 「重工業」 = ‘heavy industry’

調査結果は、表1の通りである⁴。「表せる」と「たぶん表せる」と回答されたものを「肯定的判断」、「表せない」と「たぶん表せない」と回答されたものは「否定的判断」とした。

対象者の平均正答数(肯定的判断をしたもの)は6.5問(40.5%)で、標準偏差は2.20であった。

基本義を表す「重い荷物」は肯定的判断が93.1%と最も高かった。同じ基本義でも「体重」に関しては、肯定的判断は72.4%に留まり、これらの判断の数値には有意差が認められた($x^2 = 4.35$, $df = 1$, $p < .05$)。

14問中10問において否定的判断が肯定的判断より多かった。基本義以外で肯定的判断の数値が高かったものは、「労働」(62.1%)、「気分」(51.7%)であった。51.7%の肯定的判断が得られた「気分」に対し、同様に<憂鬱>を表す表現である「心」、「雰囲気」は肯定的判断がそれぞれ30%台であった。

表1. 「重い」 = ‘heavy’に関する判断

語句	語義分類	表せる	たぶん表せる	肯定的判断の合計	たぶん表せない	表せない	否定的判断の合計
荷物	<目方> (基本義)	14(48.3)	13(44.8)	27(93.1)	2(6.9)	0(0.0)	2(6.9)
体重	<目方> (基本義)	15(51.7)	6(20.7)	21(72.4)	5(17.2)	3(10.3)	8(27.6)
食事	<大量>	4(13.8)	7(24.1)	11(37.9)	14(48.3)	4(13.8)	18(62.1)
運動	<大量>	2(6.9)	9(31.0)	11(37.9)	15(51.7)	3(10.3)	18(62.1)
気分	<憂鬱>	4(13.8)	11(37.9)	15(51.7)	10(34.5)	4(13.8)	14(48.3)
心	<憂鬱>	1(3.4)	9(31.0)	10(34.5)	13(44.8)	6(20.7)	19(65.5)
雰囲気	<憂鬱>	2(6.9)	7(24.1)	9(31.0)	17(58.6)	3(10.3)	20(69.0)
頭	<不快感>	5(17.2)	5(17.2)	10(34.5)	16(55.2)	3(10.3)	19(65.5)
労働	<過酷>	4(13.8)	14(48.3)	18(62.1)	9(31.0)	2(6.9)	11(37.9)
税金	<過酷>	2(6.9)	11(37.9)	13(44.8)	13(44.8)	3(10.3)	16(55.2)
責任	<重大>	2(6.9)	10(34.5)	12(41.4)	14(48.3)	3(10.3)	17(58.6)
会話	<重要>	1(3.4)	7(24.1)	8(27.6)	16(55.2)	5(17.2)	21(72.4)
内容	<重要>	3(10.3)	11(37.9)	14(48.3)	11(37.9)	4(13.8)	15(51.7)
工業	<工業>	2(6.9)	7(24.1)	9(31.0)	15(51.7)	5(17.2)	20(69.0)

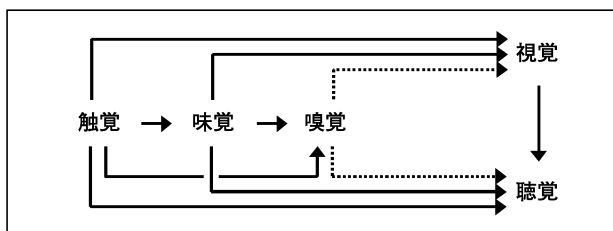
数値は対象者数、()は%を示す。

⁴ 語の意味の拡張は多義(類似性)のリンクを介して関連づけられており(Lakoff, 1987, Taylor, 1989, 山梨, 2000)、それぞれの語義の境界線はファジーなものである。従って「会話」「内容」などは文脈によっては<重大>に分類される可能性もある。

4.2 共感覚についての結果

山梨 (1988) は、五感を表す形容詞は相互に共感覚としての修飾表現、原感覚としての被修飾関係のいずれにもなり得るが、その関係には一定の制約がみられるとして、その修飾・被修飾の相互関係を図1のように表している。

図1：五感の修飾・被修飾関係 (山梨, 1988)



また、日本語の五感の修飾表現は、基本的なところでは英語に関する五感の修飾表現とかなりの点で一致するとされている。今回は日本語と英語の対応がある次のような表現を用いて調査を行った。

触覚：「やわらかい味」= 'soft taste'、
「やわらかい香り」= 'soft smell'、
「やわらかい音」= 'soft sound'、
「やわらかい声」= 'soft voice'、
「やわらかい色」= 'soft color'、
「暖かい色」= 'warm color'、
「冷たい色」= 'cold color'、
「なめらかな味」= 'smooth taste'、
「なめらかな音」= 'smooth sound'⁵

味覚：「甘い香り」= 'sweet smell'、
「甘い声」= 'sweet voice'

視覚：「明るい声」= 'bright voice'⁶

調査結果は表2の通りである。

対象者の平均正答数（肯定的判断をしたもの）は7.8問(64.9%)で、標準偏差は2.26であった。

「やわらかい」に関する共感覚表現のうち最も肯定的判断が高かったのは、聴覚への転移表現である「やわらかい音」・「やわらかい声」であった。嗅覚への転移表現である「やわらかい香り」との間には有意差が認められた ($x^2 = 11.36$, $df = 1$, $p < .01$)。また「やわらかい香り」と「やわらかい味」・「やわらかい色」との間にも有意差が認められ ($x^2 = 3.93$, $df = 1$, $p < .05$)、「やわらかい」の転移表現に関しては「香り」が他の表現に比べ肯定的判断が有意に

⁵'Smooth sound' は「快い」というニュアンスを含む。

⁶'Bright voice' は「はっきりした」というニュアンスを含む。

低かった。

同じ嗅覚への転移表現でも、味覚から嗅覚への転移である「甘い香り」は「やわらかい香り」と比較して有意に高い肯定的判断を示した ($x^2 = 15.87$, $df = 1$, $p < .01$)。

表2. 共感覚に関する判断

語句	原感覚	共感覚	表せる	たぶん表せる	肯定的判断の合計	たぶん表せない	表せない	否定的判断の合計	無回答
やわらかい味	触覚	味覚	0(0.0)	19(65.5)	19(65.5)	9(31.0)	1(3.4)	10(34.5)	
やわらかい香り	触覚	嗅覚	2(6.9)	9(31.0)	11(37.9)	17(58.6)	0(0.0)	17(58.6)	1
やわらかい音	触覚	聴覚	5(17.2)	19(65.5)	24(82.8)	5(17.2)	0(0.0)	5(17.2)	
やわらかい声	触覚	聴覚	4(13.8)	20(69.0)	24(82.8)	5(17.2)	0(0.0)	5(17.2)	
やわらかい色	触覚	視覚	3(10.3)	16(55.2)	19(65.5)	9(31.0)	1(3.4)	10(34.5)	
暖かい色	触覚	視覚	4(13.8)	15(51.7)	19(65.5)	10(34.5)	0(0.0)	10(34.5)	
冷たい色	触覚	視覚	3(10.3)	12(41.4)	15(51.7)	11(37.9)	3(10.3)	14(48.3)	
なめらかな味	触覚	味覚	1(3.4)	17(58.6)	18(62.1)	9(31.0)	2(6.9)	11(37.9)	
なめらかな音	触覚	聴覚	1(3.4)	15(51.7)	16(55.2)	11(37.9)	2(6.9)	13(44.8)	
甘い香り	味覚	嗅覚	14(48.3)	12(41.4)	26(89.7)	2(6.9)	1(3.4)	3(10.3)	
甘い声	味覚	聴覚	8(27.6)	13(44.8)	21(72.4)	7(24.1)	1(3.4)	8(27.6)	
あかるい声	視覚	聴覚	4(13.8)	10(34.5)	14(48.3)	15(51.7)	0(0.0)	15(51.7)	

数値は対象者数、()は%を示す。

5. 考察

‘Heavy’は中学校で学習する最も基本的な形容詞のひとつであり、意味の拡張の仕方において日本語「重い」との共通点も多い。しかし、今回の調査の結果、対象者は‘heavy’と「重い」の共通点・相違点を的確に判断する能力を身に付けているとは考えられなかった。肯定的判断の中であっても明確に「表せる」と判断されたものが少なかったことから、対象者はこれまでに習得した知識に基づいて判断したのではなく、何らかの類推によって「たぶん表せる」という判断を行ったものと考えられる。

「重い」に関しては、<目方>を意味する基本義の表現であっても、それと結びつく名詞によって、‘heavy’が使えるか否かの類推の仕方が異なるという結果が得られた。このことから、対象者が‘heavy’の意味範囲を基本義の中でもごく限られた範囲でしか捉えていないということが言える。「荷物」は「重い」と結びつく名詞としてはプロトタイプ的なものであり、このことが「体重」との類推の差にあらわれたとも考えられる (Meara, 1984)。本研究では基本義に関しては2例のみの調査であったが、今後この点についてより明確にする必要があると考えられる。

「気分」、「心」、「雰囲気」はともに人間の感情に関わる表現として同一カテゴリーに属し、

「重い」と結びついて<憂鬱>を表している。対象者が判断を行う際に、カテゴリーという概念を類推の基準にしていると仮定するならば、「気分」、「心」、「雰囲気」の判断値(数)は等しくなるはずである。すなわち「重い気分」の「重い」が‘heavy’に英訳できると類推されれば、その類推は「重い心」にも「重い雰囲気」にも適用できると考えるのが自然である。今回の調査では「気分」、「心」、「雰囲気」の判断値(数)の間に有意な差は認められなかったが、それぞれの数値にばらつきは認められた。形容詞などの多義語における効率的な意味内容の把握のためには、個々の名詞との結びつきを1つひとつ記憶するのではなく、カテゴリーとして捉えるべきであり、逆に言えば、カテゴリーとして捉えることができるならば、意味範囲が明確に理解できているといえる。今回の調査のみでは対象者が類推を行う際にカテゴリーの概念を用いていたのか、それとも「重い」と結びつく名詞を個別的に判断していたのか明らかにできなかった。今後さらに調査を行い、検討する必要があると考えられる。

共感覚表現は日常的にもっとも頻繁に使用される比喩表現であり、基本的な意味と同じ程度に慣用化され、比喩として意識されることは少ない。日本語と英語の間の一致度の高さは、人間の五感に関わる表現がある程度の普遍性を持っていることを示している。「重い」の結果と比較しても、共感覚表現の肯定的判断の数値は全体的に高かったといえる。ただし「やわらかい香り」= ‘soft smell’ に対する肯定的判断が他の「やわらかい」の転移表現よりも有意に低かった点は、英語においても ‘soft smell’ を適切な表現として認める容認可能性が低いことと一致している。また同様に肯定的判断の低かった「あかるい声」については、‘bright voice’ との微妙なニュアンスの違いを対象者が感じ取ったからであるとも考えられる。対象者がこれらの判断を知識に基づいて行ったとは考えにくく、直観的類推が共感覚表現においては正しい判断に結びつき易かったと考えられる。Kellerman (1979) は、言語転移の起こりやすい条件のひとつとして、「学習者が L1 について感じている有標性・無標性の程度」を挙げている。L1 において、ある表現が学習者にとって無標であればあるほど L2 への言語転移は起こりやすいという考え方である。この仮説を適用するならば、共感覚表現は一般的な形容詞の意味拡張表現よりも無標性の高い表現であると言える。

しかし共感覚表現の肯定的判断の数値は、「重い」との比較においては相対的に高かったと言えるかも知れないが、個別的にみた場合、肯定的判断の数値が 80% を超えたのは 12 問中 3 問のみであり、高い数値であるとは言いがたい。Kellerman (1979) は言語転移の起こりやすい条件として、上に挙げた「有標性・無標性」の他に、「学習者が L1 と L2 の間に感じている距離」を挙げている。共感覚表現は言語的には無標であるが、対象者が日本語と英語の距離が非常に離れていると感じているために、共感覚表現の無標性が失われ、比喩として過度に意識された結果、正しい判断を妨げたと考えられる。

言語は人間が外界をどのように認知しているか、どのように関わっているかの表象であり、

言語が異なっても認知のレベルでの共通点は多い。例えば「重い」も 'heavy' も日常的な知覚や経験を背景として、基本義の〈目方〉を表す概念から心理的な重さを表す〈憂鬱〉、さらには精神的にかかる負荷を表す〈重大〉にその意味を拡張している。学習者が英語と日本語との間に感じている距離感は、何でも闇雲に直訳しようとする負の言語転移は防ぐことはできるかも知れないが、一方では概念の共通性までも覆い隠してしまう要因になっていると考えられる。

6. 結語

一般的に言語習得においては、「正確さ」(accuracy) が中心的な目標となる。誤解のないコミュニケーションのためには、正しい言語運用を行うべきであることは言うまでもない。しかし今日、英語は世界共通語として位置付けられており、言語形式の規範も多様化している。このような状況においては、単に「正確さ」のみでなく、英語話者にどの程度受け入れられるかという容認可能性 (acceptability) に注目する必要がある。「正確さ」のみにこだわり、誤用に対して慎重になりすぎることは、表現することに対する学習意欲をそぎ、英語学習に対して悲観的で消極的な態度を助長することにもなりかねない。言語転移に関してはこれまで負の言語転移というマイナス面が取り上げられることが多く、それ故に日本語を媒介とした第二言語学習は批判を受けてきた。しかし一方で、L2 の心的語彙が L1 の心的語彙の干渉を受けず構築されることは困難であると考えられている (Meara, 1984, Takahashi, 1984)。L1 の心的語彙に記憶されている語のスキーマを正の言語転移として利用し、効果的な L2 スキーマを構築することを可能にするような語彙学習システムの開発は第二言語習得方法のひとつとして重要であると考えられる。

引用文献

- Kellerman, E. 1979 Transfer and non-transfer: where we are now. *Studies in Second language Acquisition*, 2, pp. 37-59.
- Lacoff, G. 1987 *Women, Fire, and Dangerous Things*. The University of Chicago Press.
- Meara, P. 1984 The study of lexis in Interlanguage. Davis, A. et al., eds., *Interlanguage*. Edinburgh University Press. pp. 225-35.
- Taylor, J. R. 1989 *Linguistic categorization: Prototypes in linguistic theory*. Oxford Univ. Press.
- Takahashi, T. 1984 *A study on lexico-semantic transfer*. Ph.D dissertation, Teachers College, Columbia University.
- 青谷法子. 2001 多義語の語彙ネットワークに関する研究 (1). 東海学園大学研究紀要、第6号. pp. 149-159.

飛田良文、浅田秀子編. 1991『現代形容詞用法辞典』. 東京堂出版.

山梨正明. 1988『比喩と理解』. 東京大学出版会.

山梨正明. 2000『認知言語学原理』. くろしお出版.

参考文献

Meara, P. 1980 Vocabulary acquisition: a neglected aspect of language learning. *Language Teaching and Linguistics: Abstracts*, 13, pp. 221-46.

Meara, P. 1993 The bilingual lexicon and the teaching of vocabulary. Schreuder, R. et al., Eds., *The bilingual lexicon*. John Benjamins Publishing Company. pp. 279-297.

Odlin, T. 1989 *Language Transfer*. Cambridge Univ. Press. (丹下省吾 (訳) 1995『言語転移』. リーベル出版.)

Tanaka, S. and Kawade, S. 1986 The role of the L1 filter in the selection and representation of specific exemplars. *茨城大学教養部紀要*, 18. pp. 143-164.

Williams, J. M. 1976 Synaesthetic Adjectives: A Possible Law of Semantic Change. *Language*, Vol. 52, No.2. pp. 461-478.

田中茂範、高橋朋子. 1993『英単語ネットワーク・形容詞編』. アルク.